

医療領域における臨床心理実習のルーブリック評価に関する研究

A study on rubric evaluation of clinical psychology practice and training at medical fields

古田 雅明

Masaaki Furuta

大妻女子大学人間関係学部

Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University

キーワード: 臨床心理実習, ルーブリック評価法, 医療領域

Key words: Clinical psychology practice and training, Evaluation method using rubrics, Medical fields

1. 研究目的

1996年にスタートした日本の心理臨床家養成の大学院教育制度は、2018年より公認心理師として新たなスタートを切ることになった。この間、複雑化する現代社会の「こころ」の問題に対する社会的要請に応えるべく、各大学院が独自の臨床心理士養成教育を行ってきたが、心理臨床家が「こころ」という不可視の領域の専門家であるため、日本ではさまざまな学派による、経験則に基づいた個性的な教育が行われてきたとの批判があった^[1]。

一方、国家資格としての公認心理師は、その専門スキルをエビデンスと共に明確化するとともに、有資格者の専門スキルの質を担保することが求められる。実際に公認心理師資格制度を構築した厚生労働省と文部科学省は、実習時間や実習内容、実習指導者の要件等を詳細に定めている。

この専門スキルを養成するための要となる教育が、臨床心理実習であることは論を待たないが、さまざまな実習の中でも、とりわけ、精神科を中心とする医療領域における学外臨床実習が重要とされている^{[2][3]}。

従来の臨床心理士養成における精神科の実習は病院ごとで実習可能な内容が異なることに加え、大学院生（以下、院生）の個性と大学院教員（以下、教員）の教え方の独自性によって、相当に個別性が高い現状にあった。この個別性の高い実習において何が院生に共通の課題であり、彼らが何を共通して学んでいるかを抽出することで、将来的に精神科領域における実習のミニマムエッセンスを決定する必要がある。というのも、多くの教育機関が臨床心理士養成と公認心理師養成を同時に行っていくため、省令等で定められた実習に加

え各校や各医療機関独自の養成教育の特長をも活かしつつ、画一化された国家資格教育にとどまらない個別性のある心理臨床家の養成教育が求められているからである。この個別性や独自性の問題について、これまで病院独自の実習に関する事例研究^[4]や院生へのインタビューの質的分析^[5]などが探索的に行われてきたが、従来の臨床心理士養成における病院実習の共通性と個別性を十分に描いているとはいえない。

以上の学術的背景を鑑み、心理臨床家の初期教育を専門としてきた筆者は、心理臨床家の専門性を明確化することを試みると共に、院生が大学院の実習を通じて何を実際に獲得してきたのかを探索してきた^{[6][7][8]}。

本研究はその一環として学外の臨床現場の要請と大学院教育の目標を相互に反映させることを目指し、医療機関の現地指導者との協同による臨床実習のルーブリック評価法の構築を目的とするものである。具体的には、実習生と大学教員と医療機関の3者間で何を実習の到達目標とするかを専門スキルの水準で明確化するルーブリック評価法の作成を目指すものである。従来の臨床心理士養成で培われた病院実習指導の知見を公認心理師養成へとスピルオーバーさせることも視野に入れているものである。

本稿ではその中でも病院実習において、院生が何に注目したり、困難を感じたりしているのか、そして何を学んでいるのかについて、より客観的な視点から、その共通点の抽出を試みるために実習記録のテキスト分析を行ったのでその結果を報告する。

考察

院生は共通して、患者さんと自分の交流の様子に最も多く注目し、記述していた。また、その際に患者さんの様子だけでなく自分に生じた感情についても記述していた。この院生の記述の共通点は、クライアントーセラピスト間の心理力動を理解する基礎であり、病院が提供する実習内容と大学院の実習記録フォーマットに基づいた、教育者側の目標に応じたものと言える。一方、実習前半と後半との変化から院生の実習上の注目点の個性が見出せる。本研究では3名が実習中、客観的観察の姿勢を一貫させていたが、実習前半の観察対象が他職種の仕事だったのに対し、後半は臨床心理士の仕事へと変化していた。また他の2名は、実習中、関わりながらの観察の姿勢を保ちつつ、1名は患者さんとの交流に注目し続け、もう1名は臨床心理士や医師に注目し続けるなど、観察対象をあまり変化させていなかった。教員や病院の臨床心理士には、このような院生の個性をも考慮した指導が求められよう。

3. まとめと今後の課題

本稿では、従来の臨床心理士養成を主眼とした病院実習の実習記録を分析したが、今後は、公認心理師養成開始後の実習記録の分析との比較や調査協力者を増やすと共に他院の実習も対象にして、抽出した共通点の妥当性を検討すると同時に、各校、各医療機関の独自性をも抽出する必要がある。

引用文献

- [1] 下山晴彦. 臨床心理学の教育・訓練システムをめぐってー英国および米国の状況を参考としてー. 臨床心理士報. 2000, 12, 19-32.
- [2] 伊藤直文・村瀬嘉代子・塚崎百合子他. 心理臨床実習の現状と課題ー学外臨床実習に関する現状調査ー. 心理臨床学研究. 2001, 19(1), 47-59.
- [3] 津川律子. 第9章 臨床心理実習2ー現場研修ー. 下山晴彦(編)臨床心理実習論 誠信書房 2003, pp.369-398.
- [4] 金坂弥起. (2006). 精神科病院における臨床心理実習についての一試論. 臨床心理学, 2006, 6(5), 645-650.
- [5] 岩橋知子・友清由希子. 学外医療領域における臨床心理実習の学びについての質的研究. 福岡教育大学心理教育相談室研究. 2008, 12, 33-40.
- [6] 古田雅明・八城薫・乾吉佑. 臨床心理士の専門性に関する基礎的研究ー臨床心理士・看護師・訓練生の比較ー. 心理臨床学研究. 2008, 26(2), 218-223.
- [7] 古田雅明・加藤佑昌・森本麻穂. 医療領域における臨床心理実習の多面的評価方法に関する研究. 大妻女子大学人間生活文化研究. 2015, 26, 31-36.
- [8] 古田雅明・栗田麻美・林香奈子. 大学院生の病院実習記録のテキスト分析 2015 日本心理学会第79回大会発表論文集, 390.

4. この助成による発表論文等

学会発表

- [1] 古田雅明・栗田麻美・林香奈子 大学院生の病院実習記録のテキスト分析 日本心理学会第79回大会 2015年9月23日 名古屋国際会議場

学会賞受賞

- [1] 日本心理学会第79回大会 学術大会優秀発表賞